

図書館 だより

第 23 号
1996. 3. 1 発行

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 〒514-01三重県津市一身田中野157 Ⅱ0592-32-2341

目 次

- 蟬の“出会い” 渡 邊 康 良 (1)
「欧州滞在記・言語篇」 杉 山 雄 規 (4)
新規受入図書案内(1995年4月～1995年8月受入分) (6)

■ 蟬の“出会い” ■

渡 邊 康 良

この時期に、出会いだとか、輪廻転生だとかいえば、お前もあれか、あれの仲間だったのかと疑いの目で見られかねない。なにせ、例の本部の近くの生まれである。(同じ県内、車で30分の余、真理に至る道は、なお遠く、車で一時間の余はかかる。真裏である。富士の。)それをあえて取り上げてみようというのであるから、それはそれ相応のわけがある。

年の暮から正月にかけて、故郷を訪ねるたびに、除夜の鐘を聞きながら初詣をすませたものである。それが、神社の鳥居を横目で見ながら通りすぎる。あるいは、賽銭箱……いや、それどころか、拍手のひとつも打たぬとは、何という変り様であろうか。この話の中で、その意味するところを汲み取って欲しいものである。無論、無理じいをするつもりなどは、毛頭ない。

人生は、出会いである。それに尽きる。……陳腐にすぎる。陳腐にすぎて、とうに償却済みとなった古めかしい言葉である。今では、備忘記録(例えば、人間の記憶とは、かくもあてにならぬものばかりに、1円というような名目金額を付けて、忘れぬように帳簿に残すこと。)にその跡を留めるにすぎない。自然、人の口にのぼることも少ない。減価の原因は、

と聞かれたら、時の流れ、技術革新のなせる業とでも応えることにしたい。あれから、20数年、四半世紀の余が経ったことになる。覚えてい、という方がおかしい。

人は忘れ易い。忘却とは、忘れ去ることなり。忘れえずして……。何かのメロドラマの名セリフである。これなどは、備忘記録さえ付け忘れ……。いやそれが、ひよんなことで、復活の憂き目を見ることとなった。

「傲慢不遜であってはいけない。蟬が地面で謳うといけなから。」アリストテレスの『弁論術』の中のギリシャの賢人の言葉である。傲慢不遜とは、侵略行為を意味し、その結果としての国土の荒廃、本来樹上で謳うはずの蟬の声を、地上で聞く羽目になる。このことを念頭に置いて、あのことを思い出してみることにはしたい。

いつも紫陽花の頃ともなるとあのことを思い出す。確か一度忘れた。確かに忘れた。キレイ、サッパリと忘れた。忘れたはずだ。それが、それを思い起こさせてくれたのが、あの出会いである。どれを偶然と呼び、どちらを必然と読んだらいいのかは、論ずるまでもない。前者が偶然であり、後者が必然である。なにせ、あの連中のたくらみのひとつなのだから。

僕は案外に出不精である。クラブに所属し、走ってみたこともある。人前に立って、一人前に挨拶のひとつもしたことがある。それで

いて華やいたことや、人を先導することなどは好まない。あんたが大將！それで結構。それが一番。なにせ、責任を負わされることもない。こうなるともう、怠け者の烙印とともに、無能、能無し汚名が付いて回る。それも結構。こんなじゃなかった、というのが知人の口癖のひとつである。それも古い知人、竹馬の友と呼べる連中である。大分遠くもなった。

それでいて、人を余り信用しない。静岡のお人好しという言葉は、是非とも返上したいものである。見かけほどのノ一天気でもない。腹の底のどこかで、冷たく見据えたところがある。生馬の目を抜く江戸で、15年ほど揉まれたせいであろうか。それとも、隠れていたものが、年とともに開花したものか。有難くもない才能の開花である。

前置が長くなった。学生諸君と同年輩の頃、僕は、ゼミの仲間と一緒に、紫陽花の寺で名高い鎌倉は、明月院を訪れたことがある。総勢11名だったか。このあたりの記憶も定かではない。人生の行く末を決めかねる男は僕一人。残りの10名は、全て行く先の決った心気高い若人達である。日は、季節に遅い花曇。薄日の零れることもない。雨でも降れば、紫陽花の花に傘が美しい。差し掛ける傘の先に、人の姿のひとつも捜してみたくなる。それが無粋な男10人に女一人（日本人ゼミ生）。絶妙のバランスである。これで例の出会いさえなかったら、なんの変哲もないただの平凡な旅に終わったものを。時とともに、記憶も薄れ、備忘価格さえも付け忘れる。忘れぬために付けるのが“日記”。記憶を捜る縁となる。これがいけなかった。“日記”にさえ、頼りなさが付きまとう。そんな話である。いたってくだいが。こうでもしなければ判ってもらえそうもない回りくどい話である。

あれから数年余りが経ったであろうか。場面は、クルリと変って、春、薄日の零れる庭先で、花壇の手入れに余念がない。わが家の庭先とフェンスひとつ隔てた鎌倉古道の名残りの道を、花車な外人女が、モンロー・ウォークよろしく、はにかみの笑みとともに、左に右にと揺れる。左に揺れれば、富士、木花え開耶姫。右に揺れれば、箱根の名湯に白い湯

煙。硫黄の臭いにも負けぬ箱根ウツギの季節を間近に臨む。今は、自惚れの花、黄水仙。四月は初め、いや三月の末だったか、桜の花にも十日ほどはある。ためらいの中に通りすぎた。

季節も変った。人生も変った。10年の時が経った。眼下には、乾きの大地が見える。L.A. 人の手形に、星の印。人の顔にタバコの煙吹きかける白人女の嬌声。脇にごついゴリラ顔。これが花の都、映画の都……なのかと……。一瞬己れの目を疑いたくもなる。荒廃の中に……。己れの足下を確かめてみた。確か、タールの海に、家の化石が白く浮かんだあたり。絵画館の壁に、歌麿だったか、北斎だったか、それとも写楽だったか、人は忘れたが、浮世絵の美に魅せられた男達の心情的いや激情の跡が架かる。ぐるりと一周、いや華やいては遡行する、品の中に温もりを感じさせる母娘。……どこかで出会ったのだろうか。思い起させるものは何もない。惑わず……。己れも遡行した。

40の坂は越した。もう50の声さえ耳に届く。近未来。

宿で、こんな声を耳にした。何か思い起こすことはないか。彼女とは何度出会った。……今度で何度になるね。

今日の出会いは偶然であれば、今までの出会いも偶然。そんな偶然の出会いの中で、何か法則のようなものでも、あるいは神の意志とでも呼べるようなものでも見つけることができたとしたら……。それこそが偶然と呼べるのではあるまいか。己れの記憶では……。

振り返ってみることにしよう。母親は60才あたり、上品さの中に、娘（20才代後半）への気使いの微笑を見せる。娘と見れば、いわゆるブルーネット。あたりの美しさに、静けさを与える。丁度僕ぐらいか。上背。華奢。黄水仙の女と見れば、あの娘は20才あたり。上背にして同じぐらい。巾が少し増しただろうか。数えれば、才の頃も同じ。同一人とすれば、七変化の女は、僕より、2つか3つは上の才か。30には届くまい。右の豊かな髪を黄金色に靡かせる。ボディガードの三人。色浅黒く、顔の彫深く、まるでハードボイルド映画のスター達。黒人か。ラテン系か。あ

の娘、どこかモザリアーニの絵にも似る。

影の声は、こうもいった。同一人とは思えんかね。あそこ（鎌倉、鶴ヶ岡八幡宮）は、ロケーションのメッカ。ここは、LA、ハリウッドの近く。

こんな荒唐無稽な話を、誰が信じようか。狂人の戯言。夢想癖。二番目の女は、旅の間髪を染めていたことは一度もないという。ブロードの連れれの男は、三人が三人とも、いずれも小柄。黒髪。ブルーネットの連れれと聞けば、大柄の大男。第一、顔が違う。女の顔が違う。似ていないじゃないか。面長というだけで。この擦れ違いは……。僕の記憶の誤りであろうか。記憶は、23才あたりをピークに、急激に劣ると聞く。

愚にもつかぬ出会いなど、一篇の書物に劣る。ただ一言の言の葉に劣る。思い込みほど恐ろしいものはない。悲しいこともない。悲しすぎる。一人よがり。傲慢不遜。出会いの強制など……。された者の脳裡のひだに、不快なしこりを残すのみ。蟬は、樹上で鳴いてはくれぬ。せいぜいが、朽ちかけの倒木の上、一人の男が腰かけるだけの気強さもない。それでも、間違いでも、あの出会いが、己れを他人と誤認し、訪ねてくれた娘の心情に発すると思えば、礼の言葉のひとつも述べさせてもらいたくもなる。あれから一度、あの女は、信仰心厚い男の腕に抱かれたという。それが間違いだったとはいわない。己れの記憶を押しつける“傲慢不遜”な行為の中に、何か得るものでもあったのであろうか。間もなくあの女はまた廻行した。

先日、とある店の店先で、ある娘に出会った。その数日前に、別の店のレジで、ある女性に出会った。僕は、声をかけてみたくなった。「君、こんなところでアルバイトでもしているのかね。授業は……。今日は講義のある日だろう。」なに、他人の空似。三人が三人とも全くの別人。よく見れば判る。上背が違う。三人とも。角度を変れば……。それっ、全く似てないじゃないか。あれから数ヶ月して、また僕は彼女達に声をかけてみたくなった。「君達！世の中には、自分によく似た人が三人いるというじゃないか。三人で会って、お互いに、確かめあってみてはどうかね。ただし、

僕は、自分によく似た人に出会ったことは一度もないが……。ね。」

もう忘れることもあるまい。「日記」も焼却した。己れの心の“日記”だけ、どうしたとか、燻ぶってくれてならぬ。もう大概にして欲しいものだ。才を取れば取るほどに、昔が懐しく見えるものらしい。もうそろそろ明日の夢がみたい。信仰心などはないが、生まれ変わることもあれば……。あの女とはいわぬ。この女ともいわぬ。せめて……。あんな女と再会がしてみたい。あいつも生まれ変わっていることだろうし、蟬のように樹上で謳うか、樵のように、巨木の感触をこの腕で確かめてみるか。できることならば、記憶の中だけは、すっきりとした清流にしこりを押し流し、香魚鮎の藻喰む跡を留めるだけの石塊に委ねたい。いや、これも記憶に重すぎるか。いやいや、コンクリートも水に浮く世の中だ。

追伸

どうしてあのブルーネットは、僕の名前と住所とが判ったのであろうか。無論、口をきいたこともないし、手紙のやりとりをしたこともない。友達のイタズラとも考えにくい。なにせ、翌週、有名女優のロケーション姿と決めつけて、神社の宮司にまで問い合わせしてくれたほどなのだから。それとも科学文明の力が与っているのだろうか。土星から、いやその外側から電波が届く。その電波にのせて映像が届く。“スパイ”衛星は、道端の石ころひとつを判別するという。無論、車のナンバーの識別などお手のものである。

ちなみに、あのブルーネットの父親は、超有名人と聞く。誰でも名前ぐらいは知っていると。彼女の母親にしてもだ。だが、しかし……。この擦れ違いはどうしたことだろう。永遠の謎とでもしておこうか。そうする以外に方法はあるまい。Welcome P.D! Welcome to Japan! あいつのパスポートには、入国のスタンプがない（……はずだ）。一緒に来日したという“父親”の発言、とっておこうか。おっと、口をすべらせた。口のすべらせついでに、あの父娘は（母娘もだが）、メチャクチャに仲が悪い。苗字まで変えている。（アメリカでは許されるという。積木崩しである）。日本は法治国家である。

結論。あいつの出会った男は、俺ではない。俺の出会った女も、あいつではない。夢は美しい。美しい方がいい。

(注) 若干の脚色(1%ほど)を除いて、ウソはない。その脚色にしても、相手への影響を考えてのことである。無論、確認作業を不可能にするための僕なりの配慮である。実に苦勞性である。これも県民性か。やれやれっ!

気障なところは、皮肉をまじえ、それでいて気持の高ぶりを押えつつ書いたためである。気障といえば、“あいつ”の方がずっと気障だ。ゴルビーはいつか。“あいつ”のことを三流俳優!と書いた。僕は“あいつ”のことを、一流半の俳優だと思っている。出ればよかったものを!“カサブランカ”!紫陽花の女は美しい。主演女優にも負けぬ。(あいつと“あいつ”とは全くの別人である。念のために。)ただ、いかんせん、体が大きい。大きすぎる。例えていえば、大木に蟬……。大輪の百合。

■「欧州滞在記・言語篇」■

杉山雄規

今年8月から2ヶ月間ばかりスイス(Bern大学, GenevaのCERN)・ドイツ(Duisburg大学, JulichのKFA)を中心にヨーロッパに滞在していました。Bernには昨年7ヶ月間居たので、その理論物理学関係のメンバーとは既に顔なじみです。いつも議論する相手のHasenfratz, Niedermayerはハンガリー人。(彼は本当は本国のBudapest大学の教授なのだが、ハンガリーは彼に給料が払えなくて、彼はここBernで仕事をしている。)ポーランド人のHazicheck(彼は自分の子供はいなくて私生児を3人引き取って育てている。しかも、中国人、インド人、スイス人の子供を。)スイス人のMinkovsky(彼は有名なMinkovskyの孫で、アインシュタインをよく知っている。彼とはスキー友達で、話し好きのいい奴。)それから、カナダ人のAlan Herd(Alanは日本好きで、囲碁の大ファン。スイスの囲碁協

会の理事をしていて、Bernで囲碁クラブを主催している。僕も毎週通わされてました。)あと、スイス人のGassaとLeytwyler。その他に、Pos.Doc.と呼ばれる若い研究員が居る。スペイン人のEmilio、フランス人のChristoph、イタリア人のGilberto、イングランド人のChris、それに日本人の樋口。彼は僕の古い友達でこんな所で会うとは、世間は狭い。

言語について。われわれ仲間内では英語で話しますが、なんせ、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などが、ごた混ぜになっているから話している途中から言語が換わったりする。話しを聞いてたら途中からわからなくなって、気がついたら途中でドイツ語に換わっていたとか。HasenfratzとNiedermayerと僕の3人で議論していると途中からハンガリー語になったり、スイス人の学生が来るとスイスドイツ語になったり。

スイスには古くからRomanish語というラテン系の言語があるが、今は周辺国の近くの言語、ドイツ語、フランス語、イタリア語が話されていて、3つとも公用語として認められている。公共物の表示から商品の名前説明書きまで3つの言語で書いてある。Bernではドイツ語が話されている。しかしドイツ人はスイスドイツ語を聞いてもさっぱりわからないらしい。確かに発音がかなり違うし、フランス語、イタリア語が混ざっている。例えば「Thank you very much.」はドイツ語では「Danke vielmal.」だがスイスドイツ語では「Mercy vielmal.」というのが普通。電車で30分乗って隣のFriburgに行くとそこではフランス語が話されている。人種も雑多で、Bernのどんな場所でも5、6種類は見かける。みんなそこに住んでいる連中だ。安いレストランなんかに入ると、10ヶ国程度の言語は飛び交っている。国際的に云うには、あまりに日常的だ。

Alanは日本語を勉強していて、ときどき日本語についての質問をしてくる。彼はぼくを'sensei No.2'と呼ぶ。'sensei No.1'は樋口氏。朝、二人でいるところにAlanがやって来て「Oh sensei-tachi, itadakimasu!」とか言う。Sensei 2人は誰かもう一人いれば英語でしゃべるので、秘書のRuthには僕らがいつも英語

で話しているように見えるらしく、「日本人は普通、英語で話すの？」とまじめに聞かれたのには驚いた。

日本人に対する知識の無さ「言語篇」の例をもう一つ。下宿先のMullerさんの娘夫婦と食事したとき。娘の旦那さんに、日本では数字や数式をどう書くのか？と聞かれて、微分・積分、代数の公式などを書いてみせると、「我々と同じだ。」(あたりまえだろ!) どうも彼は漢字の数字で式を書くことを期待したらしい。(確かに江戸時代はそう書いていた。) 彼は土木プラント関係のエンジニアで漢字を知っているほどのインテリなのだが。

以上は極端な例だが、ヨーロッパの人は日本人が考えているほど日本との距離が近くなったとは感じていない。依然として日本は遙かなたの東洋にある神秘の国のようだ。少なくとも彼らは日本人よりも中国人や朝鮮人の方をよく知っている。ヨーロッパに根付いて暮らしている数は日本人よりずっと多い。スイスで見かける東洋人は、観光地以外は殆ど中国人か朝鮮人。フランスやドイツ、イタリアも同様。日本人はツーリストが殆どで、しかも集団で移動している。住んでいても数カ月かせいぜい1、2年のビジネス関係の人たちで、かたまって棲息している。要するに日本人は通過して行くだけの人種なのだ。日本に対する知識の無さも当然かという気がする。

スイスでは3つくらいの言語をしゃべれる人が結構いる。マーケットに買い物に行くとドイツ語がしゃべれないでいると売り場のおばさんが「何語? フランス語、イタリア語、スペイン語?」と聞くので「English!」と言うと、英語でしゃべってくれた。オランダやベルギーだともっとすごくて5、6ヶ国語はしゃべれる人がざらだという。ベルギーのブルージュで会った運河を走る船の運転手のおじさんは、7ヶ国語しゃべれて乗客の人種を見て4種類ぐらいを使い分けて名所案内をしていると言っていた。オランダのLeidenにいるイタリア人の友達のAngeloに会いに行ったとき、オランダ人の英語のうまいのに驚いた。小さな街のマーケットのレジの娘でも、子供でも結構上手い。

総じて、小国では何種類かの言語を話せる

人が多いが、ドイツ、フランスなどの大国では自分の国の言語しか話せない人が多いように思う。ドイツでは英語が充分通じるといわれるが、そんなことはない。ドイツに2年居た日本人の友達は、しゃべれるのだがしゃべろうとしないのだと云う。特に公共機関がそうだ。確かに、スイス、オランダあたりに比べて対応は不親切だ。しかし、ドイツ人の友達Michael(今回1ヶ月いたDuisburgの教授)によると、実際はしゃべれない人が多いんだそうだ。フランス人も似たようなものだ。単語は英語でも発音はフランス語のままなので、かえってわかりにくい。フランス人の友達のChristophも僕の感想に同意していた。ドイツに1ヶ月いて驚いたことの一つ。テレビで放送しているのはもちろん劇場で演っている外国映画も全部翻訳なのだ。スイスだと劇場映画は全部原語のまま、Bernではドイツ語、フランス語の2つの字幕が付く。

ヨーロッパの歴史の中で一国の言語が替わることはさほど珍しいことではない。日本は日本人しか住んでなくて、ずっと日本語しかしゃべってない特殊な国だと実感した次第です。

新規受入図書案内

(1995.4~1995.8)

総記 (000)

〔岩波新書〕

祖国よ(中国残留婦人)の半世紀	小川 津根子
国際金融入門	岩田 規久男
細胞から生命が見える	柳田 充弘
従軍慰安婦	吉見 義明
年金入門	島田 とみ子
韓国併合	海野 福寿
東欧再生への模索	小川 和男
アメリカ産業社会の盛衰	鈴木 直次
バナナと日本人	鶴見 良行
水の環境戦略	中西 準子
神戸発阪神大震災以後	酒井 道雄
核解体	吉田 文彦
科学技術の戦後史	中山 茂
現代史を学ぶ	溪内 謙
戦後を読む	佐高 信
戦後を語る	岩波新書編集部編
戦後の日本経済	橋本 寿朗
遺族と戦後	田中 伸尚他著
日記	五木 寛之
災害救援	野田 正彰

〔岩波ブックレット〕

兄の影を追って	中村 克郎
子どもの病氣	毛利 子来
神戸難民日誌	津村 喬
薬害エイズ	広河 隆一
科学と技術のあゆみ	道家 達将
朝鮮・中国と帝国日本	井口 和起
情報公開はなぜ必要なのか	自由人権協会編
オウム真理教の軌跡	島園 進
50歳われらの戦後	落合 恵子他著
三光作戦とは何だったのか	姫田 光義
被爆者たちの戦後50年	栗原 淑江
国税調査を調査する	山本 勝美

哲学 (100)

権力と正統性 現代思想16	新田 義弘他著
心理面接のすすめ方	西村 良二
哲学と現実世界	牧野 広義
欲望	丸山 圭三郎
表情	廣松 渉

仕事	今村 仁司
かたり	坂部 恵
あいだ	木村 敏
場所	上田 閑照
競争社会をこえて	アルフィ・コーン
無根拠からの出発	野家 啓一
ジーンズ著作集1~12	生松 敬三他著
夢分析入門	鎌 幹八郎

歴史 (200)

法律家のみた日本古代千五百年史	山中 順雅
バルミ地中海沿岸の都市	川添 登他著
レベック北海に面した港町	川添 登他著
オーストリア	池内 紀
倭人の絹	布目 順郎
明治初年地租改正の研究	北條 浩
鳥居龍蔵伝	中園 英助
明治維新と外圧	紙屋 敦之他著
明治維新の再発見	毛利 敏彦
四日市市史 第16巻	四日市市
三重県史 資料編	三重県
国際史学入門	横内 慶八郎
わたしたちのふるさと勢和	勢和村史編集委員会

社会科学 (300)

経済学的手法の現在	木下 悦三
法学入門	日本評論社
平成6年度 公開講座	
現代を健康に生きる	三重短期大学公開講座運営委員会
投票行動の政治学	荒木 俊夫
比較憲法入門	阿部 照哉
わが国官民国際協力 現状と課題	政経潮流
国民生活の向上	松田 延一
現代の憲法	長谷部 恭男他著
講座憲法学	
1. 憲法と憲法学	樋口 陽一
2. 主権と国際社会	〃
4. 権利の保証(2)	〃
5. 権力の分立(1)	〃
6. 権力の分立(2)	〃
刑法(法律学への第一歩) IV	村井 敏邦
注釈憲法 第3版	伊藤 正巳他著
日本の国際貢献	経済広報センター
日中関係の150年	山田 辰雄
日本人のしつけと教育	東 洋
スラムの経済学	中西 徹

住宅政策と社会保障 社会保障研究所
 民間防衛 スイス政府
 刑事弁護・捜査の理論 椎橋 隆幸
 刑事訴訟法講義 福井 厚
 判例刑法総論 西田 典之他著
 口述刑法総論 中山 研一
 国際刑法入門 森下 忠
 刑事法入門 山中 敬一
 アイヌモシリに集う

二風谷フォーラム実行委員会

憲法裁判の可能性 奥平 康弘
 現代の平和主義と立憲主義 浦田 一郎
 憲法問題の見方 杉原 泰雄
 日本の裁判 渡辺 洋三他著
 日本国憲法を生んだ密室の9日間 鈴木 照典
 自由と天皇制 笹川 紀勝
 社会と法 黒木 三郎他著
 議会民主主義と政治改革 憲法理論研究会
 日本社会と憲法の現在 天野 武他著
 経済安定本部戦後経済政策資料

戦後経済政策資料研究会

第19巻 財政金融(1)
 第20巻 " (2)
 第21巻 " (3)
 第22巻 " (4)
 第23巻 " (5)

EU制度と機能 大西 建夫他著
 EU制度と理念 "
 EU統合の系譜 "
 容疑者の言い分 事件と人権 西日本新聞社社会部
 日本憲法史 大石 眞
 1968年時代転換の起点 岡本 宏
 戦争の記憶 イアン・ブルマ
 ネット期国営工業の構造と行動 木村 雅則
 近代の所有観と現代の所有問題 藤田 勇
 死刑廃止を求める 佐伯 千仍他著
 民主化の先進国がたどる経済衰退 村田 邦夫
 労働の人間化の展開過程 嶺 学
 保守政治リストラ戦略 五十嵐 仁
 金融新時代を読む 早瀬 保行
 日本経済と中央銀行 三重野 康
 金融機関の貸手責任と消費者保護

楠本 くに代

金融センターの形成 C・P・キンドルドーガー
 金融機関の機能と役割 荒川 宜三他著
 パリの中のマルクス 的場 昭弘
 メディア・トリックの社会学 渡辺 武達
 日本人の食生活史 下田 吉人
 食文化入門 石尾 直道他著
 アナーキー・国家・ユートピア

ロバート・ノージック

現代企業社会と法 宮島 司
 企業と現代法 中村 一彦他著
 マス・コミュニケーションの理論

メルウィンL・デフレー他著

会計方針選択行動論 飯野 利夫
 食の歴史人類学 山内 昶
 両大戦間イギリス経済史の研究 原田 聖二
 古代服飾の研究 増田 美子
 裁量の行動の経済学 井上 薫
 管理会計を語る 西澤 脩
 企業・市場・法 ロナルド・H・コース
 児童の権利条約 波多野 里望
 経済政策 常盤 政治
 総合政策学への招待 加藤 寛他著
 マクロ経済分析 田中 利彦他著
 キャッシュフロー計算書 杉本 典之他著
 コンピュータ時代の経済学入門

C・ディンウェディ他著

旧刑法(明治13年)(1) 西原 春夫他著
 刑法(明治40年)(2) 内田 文昭他著
 経済数学教室

1. 線型代数の基礎 上 小山 昭雄
 2. " 下 "
 3. 線型代数と位相 上 "
 4. " 下 "
 5. 微分積分の基礎 上 "
 6. " 下 "
 7. ダイナミック・システム 上 "

法令全書 内閣官報局

第1巻 慶応3年10月~明治元年12月
 第2巻 明治2年
 第3巻 明治3年
 第4巻 明治4年
 第5巻(1)明治5年
 第5巻(2) "
 第6巻(1)明治6年
 " (2) "
 第7巻(1)明治7年
 " (2) "
 第8巻(1)明治8年
 " (2) "
 第9巻(1)明治9年
 " (2) "
 第10巻 明治10年
 第11巻 明治11年
 第12巻(1)明治12年
 " (2) "
 第13巻(1)明治13年
 " (2) "
 第14巻 明治14年
 第15巻 明治15年

第16巻(1)明治16年
 (2) "

第17巻(1)明治17年
 (2) "

別巻 (1)慶応3年~明治17年索引1
 (2) " " " 2
 (3) " " " 3
 (4) " " " 4

完全復刻版 明治経営名著集
 福翁百話・百余話 福沢 諭吉
 最近実業談 百瀬 魁介他著
 克己実話 立石 駒吉他著
 独立自営 森村 市左衛門
 現代金権史 山路 愛山
 商海英傑伝 瀬川 光行
 実業人傑伝 広田 三郎
 実業名家講和集 商業学会
 政治経済学の再構築 J. A. クリーゲル

ポストケインズ派 経済学入門
 A. S. アイクナー
 貨幣的経済理論 D. デヴィッドソン
 ケムブリッジ資本論争 G. C. ハーコート
 巨大企業と寡占 A. S. アイクナー
 資本主義経済の動態理論 M. カレッキ
 雇用と成長 R. カーン
 資本蓄積と所得分配 D. J. ハリス
 価値と価格の理論 P. M. リヒテンシュタイン
 国際貨幣経済理論 D. デヴィッドソン
 資本理論とケインズ経済学 D. ロビンソン
 経済成長と分配理論 N. カルドア
 マクロ経済の構図 S. C. ダウ
 線型経済学と動学理論 R. M. グッドウィン
 生産と分配の理論 L. L. パシネッティ
 ケインズの経済学と価値・分配の理論
 J. イートウェル他著

ポストケインズ派 経済核の新展開
 J. A. グレーゲル
 非線形経済動学 R. M. グッドウィン
 ケインド「一般理論」と蓄積
 A. アシマコプロス
 市場と計画の社会システム M. C. ソーヤー
 Q&Aアメリカの会計百科
 ピート・マーウィック
 計量経済分析の方法 原田 桂一郎
 現代経済政策入門 長谷川 啓之
 経済分析と統計利用 芳賀 寛
 法に潜む経済イデオロギー R. P. マーロイ
 法と経済学の原点 松浦 好治
 不法行為法の新世界 松浦 好治
 実証理論としての会計学 R. L. ワッツ他著

国際相統法の研究 木棚 照一
 日本の70年戦争 丸山 静雄
 冠婚葬祭百科 日本放送出版協会
 日本教育基本文献・史料叢書
 第1巻 日本教育史 文部省
 第2巻 全国附属小学校の新研究 金港堂編集部
 第3巻 日本教育思想史 安達 久
 第4巻 国民道徳二関スル講演 文部省
 第5巻 修身科講義録 東京府内務部学務課
 第6巻 全国学校沿革史 長坂 金雄
 第7巻 思想善導論 大日本学術協会
 第8巻 大学今昔譚 三宅 雪領
 第9巻 日本近世教育概覧 文部省総務局
 第10巻 教育史余材 横山 健堂
 第11巻 大学々生溯源 橋南 漁郎
 第12巻 石上宅嗣脚 石上宅嗣脚顕彰会
 第13巻 大学の運命と使命 帝国大学新聞社編集部
 第14巻 近世学校教育の源流 高橋 俊乗
 第15巻 日本に於ける耶蘇会の学校制度 シリング
 第16巻 女子教育特輯 土屋 忠雄
 第17巻 金沢文庫の研究 関 靖
 第18巻 明治末期社会教育観の研究 倉内 史郎
 第19巻 籠谷次郎日本教育史論集 籠谷 次郎
 第20巻 巽軒博士倫的宗教論 秋山 梧庵
 第21巻 日本教育史 上・下 加藤 仁平
 第22巻 寄宿舎と青年の教育 瀧裏 文彌
 第23巻 学校改良論 寺田 勇吉
 第24巻 学校観の史的研究 寺崎 昌男他著

自然科学(400)

成人病予防の食事学 藤沢 良知
 子どもの食事 丸岡 玲子
 健康食と危険食 河内 省一
 人間環境学 鈴木 路子
 顔と表情の人間学 香原 志勢
 新・人体の矛盾 井尻 正二他著
 こころとからだの悲鳴が聞こえる 鴨下 一郎
 健康管理概論 全国栄養士養成施設協会
 阪神大震災の教訓 日経アーキテクチュア
 味と匂いのよもやま話 高木 雅行
 脳と心の化学 大木 幸介
 サイエンス食生活学 成瀬 宇平
 過酸化脂質・フリーラジカル実験法
 五十嵐 脩他著
 素粒子の統一理論に向かって 西島 和彦

環境生理学
喫煙と健康
化学(基本の考え方12章)
一品料理献立集
すぐに役立つ栄養指導マニュアル

黒島 晨汎
厚生省
中田 宗隆
医歯薬出版

地球環境保全概論
福祉施設の行事食ガイド
やさしい生活環境をめざして
地球温暖化問題に答える
私たちの生活科学
温暖化する地球・日本の取り組み
地球環境科学
衣服科学
地球環境政策

谷山 鉄郎
医師薬出版
生活環境研究会
小宮山 宏
中根 芳一
環境庁
樽谷 修
山崎 和彦

生体物理化学
食中毒の原因と対応
食品衛生実験
新しい農業の科学
生体膜
化学反応の話
がん予防ビタミン最前線
シクロデキストリン

中村 丁次他著
功力 滋
西田 博
井上 祥平他著
宮本 純之
宇井 理生他著
妹尾 学
平山 雄
戸田 不二緒

エルンスト・U・フォン・ワイッゼー
おしゃれ時代 PART2 ポーラ文化研究所
家計簿からみた近代日本生活史 中村 隆英
ごみがわかる 現代社会とごみを考える会
環境としての被服 家政学シリーズ13

生物物理化学
生命の不思議・宇宙の謎
ガン細胞の無法者たち
新人体の矛盾
免疫の最前線
食用天然色素
糖尿病の知識と食事療法

相澤 益男他著
ウィリアム・H・ショア
R. E. ラフォ
井尻 正二他著
谷口 克
清水 孝重他著
成宮 学他著

消費生活概論
ごみ特ダネ100語
日本家政学会
杉田 淳子他著
日野 仁彦他著

産 業 (600)

おかしいぞ 子どものからだ
牛乳成分の特性と健康
カビの科学
食品の物性とは何か
生命現象から見た食品衛生
糖鎖と細胞
香辛料成分の食品機能
医療行政の内幕
ウィルスで読み解く人類史
有機科学 上・下
進化からみた行動生態学

正木 健雄
山内 邦男他著
小笠原 和夫
松本 幸雄
近藤 雅臣他著
入村 達郎
岩井 和夫他著
池村 俊郎
根路銘 国昭
フェッセンデン
J. R. グレブス他著

テレビと権力
PL法時代の広告・表現戦略
マーケティング・チャンネル管理論
商学
現代マーケティング戦略の基礎理論
はじめての綿づくり
平成6年度 林業白書
平成6年度 漁業白書
平成6年度 農業白書
グローバル・ファッションと商品企画

清水 英夫
山田 理英
高橋 秀雄
来住 元朗他著
岩永 忠康
大野 泰雄他著
農林統計協会
農林統計協会
農林統計協会
河合 玲

有機化学演習
1. 化学演習シリーズ3
2. " 4
新物理化学 上・下

湊 宏
務台 漢
坪村 宏

芸 術 (700)

歩くこと・足そして靴
運動するから健康である
日本のスポーツ環境批判
オリジナルイラスト・カット集

清水 昌一
宮下 充正
中村 敏雄

工学・技術 (500)

人間環境学
間違いだらけの靴選び
住まいの計画・住まいの文化
技術と産業公害
住宅戦争住まいの豊かさとは何か
住まいの処方箋
サイズ直しと簡単リフォーム
環境と健康
向井千秋の宇宙と体のおもしろい関係
恐るべきゴルフ場汚染
恐るべき酸性雨

鈴木 路子
石塚 忠雄
鈴木 成文
宇井 純
布野 修司
早川 和男
NHKおしゃれ工房
志賀 健他著
NHK出版
谷山 鉄郎
谷山 鉄郎

グラフィック・ハウス
カットイラスト集 コマドリデザイングループ
すぐ使える広報カット 今津 次朗
すぐ使えるカット12か月 今津 次朗
ファンシーキャラクター9 MPC編集部
文楽ハンドブック 藤田 洋
映像の子どもたち 本田 和子
地球家族 ピーター・メンツェル
日本美術史 辻 惟雄
スポーツ文化論 寒川 恒夫
日本の遊び歌 川崎 洋
ランニング事典 ティム・ノックス

技久力の科学 石河 利寛他著
 体力・健康と運動科学 後藤 俊他著
 女性のライフステージからみた身体運動と健康 宮下 充正
 ソフトテニス指導教本 日本ソフトテニス連盟
 ソフトテニスコーチ教本 日本ソフトテニス連盟
 名宝日本の美術
 第1巻 法隆寺 大西 修也
 第10巻 源氏物語絵巻 佐野 みどり
 第11巻 信貴山縁起絵巻 千野 香織
 第12巻 伴大納言絵巻 黒田 泰三
 第14巻 雪舟 中島 純司
 第20巻 永徳・等伯 鈴木 廣之
 第23巻 光悦・宗達 仲町 啓子
 第24巻 光琳・乾山 西本 周子
 第28巻 歌麿 狩野 博幸
 第30巻 北斎・広重 松本 寛
 ウィーン1890～1920 芸術と社会
 R. ヴァイセンベルガー

語 学 (800)

あいさつ・スピーチ事例事典 松田 眞治
 ドイツ語で手紙を書こう 大塚 綾
 ドイツ語早わかり 在間 進
 ドイツ語1・2・3 三室 次雄
 言語行為の現象学 野家 啓一
 表現と作文ドイツ重要動詞50 福田 幸夫他著
 マイスタードイツ語コース1・2 関口 一郎
 ドイツ語ははじめの一步 上田 浩二

文 学 (900)

安岡章太郎遁走する表現者 吉田 春生
 大江健三郎論 黒古 一夫
 甘美な人生 福田 和也
 白旗伝説 松本 健一
 純愛 下重 暁子
 忘れられた国ニッポン デニス・キーン
 山本周五郎テーマコレクション 山本 周五郎
 風雪 〃
 無償 〃
 歲月 〃
 夫婦 〃
 痛快 〃
 武家 〃
 恋慕 〃
 抵抗 〃
 晩年 〃

下町 山本 周五郎
 パラサイト・イヴ 瀬名 秀明
 ほんとうの自分を求めて グロリア・スタイネム
 うたの心に生きた人々 茨木 のり子
 天気の良い日は小説を書こう 三田 誠広
 ムテッポー文学館 中野 翠
 文学交友録 庄野 潤三
 本が好き・悪口言うのはもっと好き 高島 俊男
 青春短歌大学 泰 恒平
 藤沢周平全集
 第1巻 涙いの海 藤沢 周平
 第2巻 暁のひかり 〃
 第3巻 驟り雨 〃
 第4巻 暗殺の年輪 〃
 第5巻 麦屋町屋下がり 〃
 第6巻 玄鳥 〃
 第7巻 回天の門 〃
 第8巻 白き瓶 〃
 第9巻 用心棒明抄 〃
 第10巻 刺客 〃
 第11巻 消えた女 〃
 第12巻 春秋の檻 〃
 第13巻 霧の果て 〃
 第14巻 橋ものがたり 〃
 第15巻 闇の傀儡師 〃
 第16巻 隠し剣(全) 〃
 第17巻 密謀 〃
 第18巻 よろずや平四郎活人剣 〃
 第19巻 海鳴り 〃
 第20巻 蟬しぐれ 〃
 第21巻 三屋清左衛門残日録 〃
 第22巻 市塵 〃
 第23巻 周平独語 〃
 超絶「恋」講座 清水 良典
 あなたに語る日本文学史(古代・中世篇) 大岡 信
 〃(近世・近代篇) 〃
 乱読パラダイス 香山 リカ
 大江健三郎文学の軌跡 中村 泰行
 架空旅行記 池内 紀
 小説の羅針盤 池澤 夏樹
 名作を書いた女たち 池田 理代子
 小説愛 芳川 泰久
 暗室のなかで 大塚 英子
 古典の影 西郷 信綱
 文壇うたかた物語 大村 彦次郎
 記憶よ、語れ 海老坂 武
 近代戦争文学事典第4輯 矢野 貫一
 哀愛 野間 美喜子

1995年1月神戸	中井 久夫
神の火 上・下	高村 薫
小石川の家	青木 玉
人物書誌大系 31高田三郎	高田三郎著作グループ
メソポタミヤの殺人	アガサ・クリスティー

1. 姓名: 李小明
2. 性别: 男
3. 年龄: 25
4. 职业: 程序员
5. 籍贯: 广东省广州市
6. 学历: 本科
7. 毕业院校: 中山大学
8. 联系电话: 13800138000
9. 电子邮箱: xiaoming.li@example.com